

マネージメント情報

※ 第3回イーハトーブ ET 研究会並びに渥美牛群管理サービス受精卵移植実務者研修会

11/30-12/1に仙台で行われた受精卵移植研究会に参加してきました。

下の写真は渥美牛群管理サービスの金田先生が内視鏡を使って骨盤腔の卵巢をモニターでみているところです。

実際には体外受精した受精卵をこの方法で卵管に戻し卵管の中で培養して、その後採卵と同じ方法で子宮内をフラッシュして移植可能な体外受精卵を作出回収する技術です。

因みに日本では大学、研究機関では行われてはいませんので、日本初でしかも民間での試みということになります。

<膣壁に内視鏡をいれるための穿刺>



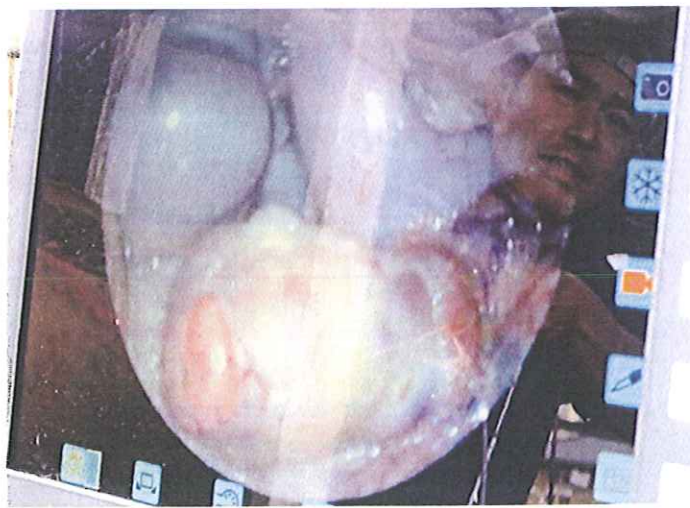
<骨盤腔に内視鏡が入ったところ>



<内視鏡の操作部分>



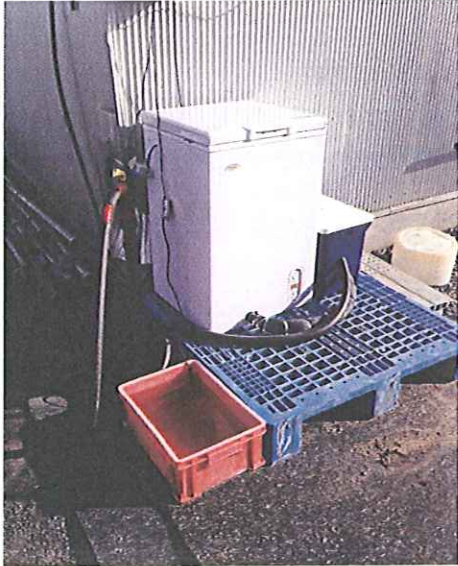
<実際の卵巢の映像>本当に綺麗です。



この方法は今年1月にウィーン大学で勉強してきたやり方で、早速渥美牛群管理サービスが挑戦しています。多少専門的になりますが、この方法で作出された受精卵は体内胚同様の耐凍性(凍結に強い)が期待されるといわれていますので是非とも成功してほしいと願っています。

※ 厳冬期の消毒槽

Sさんの牛舎の入口には厳冬期でも使用可能な消毒槽が設置されています。輸送用のパレット(0円)の上に消毒液を入れる上部開閉の格安冷凍庫(2万円)とクーラーボックス(2千円)。冷凍庫の中には凍結防止用のヒーター、クーラーボックスの中には高圧洗浄機と電気の配線。洗浄ノズルにも凍結防止の熱線とウレタンのカバーがついています。



総額 3 万円ちょっとで、厳冬期も使用可能な長靴の消毒システムが出来上がります。

牛舎の出入り口に設置されている消毒槽の実態は夏でも毎日消毒液を交換している農場は少なく、消毒液が汚れていることが多いかと思えます。

薬剤が凍結する冬期間になると消毒槽を使用する農場が極端に減少してきます。

今回紹介しました方法を実践することは簡単のようですが、衛生管理意識の差もあり意外と難しいと思っていますが、このような方法で厳冬期でも使用可能ということは事実ですので、検討の価値はあると思います。

- ・私にとって今年の仕事でいうと OPU-IVF (体外受精卵関係) の仕事に明け暮れた一年でした。OPU (卵子吸引) に関しては機動には乗っているとは言えない状況ですが培養系に関してはパートナーの谷沢さんの頑張りでそれなり以上のレベルにきていますので、期待しててください。
個人的には病気がわかってから8月でちょうど10年経ちました。憎まれっ子何とやら……でしょうか？
- ・毎年のことですが、今年も残すところ20日。あっという間の一年でした。
みなさんはどのような一年だったのでしょうか？ 毎度のことですが特にこの時期になると酪農は厳しい状況だと盛んにいわれます。TPPは年内の合意は断念と昨日のニュースで取り上げられていましたがどういう決着をするのでしょうか？

今年もいろいろとお世話になりました。
来年もみなさんにとって良い年でありますように……。